令和元年６月１日発行　第１７号

協力隊を支援する
やまがた地球家族の会

やまがた地球家族

YAMAGATA GLOBAL FAMILY

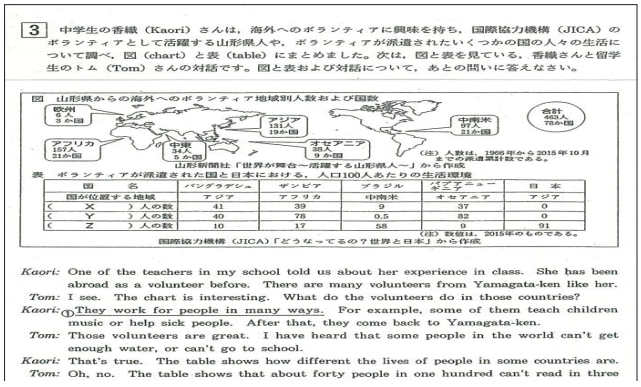
Baobabs（Wikimedia Commons より）

『協力隊を支援する やまがた地球家族の会』機関誌　VOL.17

山形県公立高校入試の出題に「世界が舞台」が活用される！

2019 年度の山形県公立高校一般入試で、山形新聞社発行の単行本「世界が舞台 －活躍する山形県人」が英語の出題に活用されました。この本は 2015 年の青年海外協力隊 50 周年を記念して、当会と JICA 東北、そして山形新聞社が協力して制作したもの。

「世界が舞台」はまもなく 470 回に達する山形新聞のロングラン連載で、協力隊など JICA ボランティアとして世界で活躍する山形県人が、それぞれの任地での活動内容やその様子、任地で感じた様々な思いを綴った文章と生き生きとした写真を寄稿。現在も毎週土曜日付朝刊に掲載されています。



3　中学生の香織（Kaori）さんは，海外へのボランティアに興味を持ち，国際協力機構（JICA）のボランティアとして活躍する山形県人や，ボランティアが派遣されたいくつかの国の人々の生活について調べ，図（chart）と表（table）にまとめました。次は，図と表を見ている，香織さんと留学生のトム（Tom）さんの対話です。図と表および対話について，あとの問いに答えなさい。

図　山形県からの海外へのボランティア地域別人数および国数

（注）人数は，1966年から2015年10月までの派遣調査数である。
山形新聞社「世界が舞台―活躍する山形県人―」から作成

表　ボランティアが派遣された国と日本における，人口100人あたりの生活環境

国名	バングラデシュ	ザンビア	ブラジル	ベネズエラ	日本
国が位置する地域	アジア	アフリカ	中南米	オセアニア	アジア
（　X　）人の数	41	39	9	37	0
（　Y　）人の数	40	78	0.5	82	0
（　Z　）人の数	10	17	58	9	91

（注）数値は，2015年のものである。
国際協力機構（JICA）「どうなってるの？世界と日本」から作成

Kaori: One of the teachers in my school told us about her experience in class. She has been abroad as a volunteer before. There are many volunteers from Yamagata-ken like her.
Tom: I see. The chart is interesting. What do the volunteers do in those countries?
Kaori: ①They work for people in many ways. For example, some of them teach children music or help sick people. After that, they come back to Yamagata-ken.
Tom: Those volunteers are great. I have heard that some people in the world can't get enough water, or can't go to school.
Kaori: That's true. The table shows how different the lives of people in some countries are.
Tom: Oh, no. The table shows that about forty people in one hundred can't read in three

（山形県公立高校一般入試問題より）

設問では、中学生が JICA ボランティア OB である先生の体験談に関心を持ち、派遣実績や各国の様子を図と表にまとめた設定。彼女は留学生に「彼らは、子供に音楽を教えたり、病気の人を助けたり、様々な方法で現地の人々のために働く」と説明しています。

県教育委員会は「海外ボランティアに目を向けてグローバルな視点を養うほか、新聞を通して社会的な視野を広げてもらいたかった」と。中学生にも「私も先生のように外国で人々を助けたい」と語らせています。

注意点などについて説明を受ける受験生＝山形市・山形東高

英語に本紙発行本を活用

2019年度県公立高一般入試の英語の出題で、山形新聞社が発行した単行本「世界が舞台―活躍する山形県人」（2016年1月刊行）が活用された。中学生が国際協力機構（JICA）のボランティアとして活躍する山形県人などを調べ、留学生と交わす対話を読み解く設問で資料となった。

単行本は山形新聞がJICAのボランティアとして活躍する県人から寄稿を受け、活動写真とともに毎週土曜日付朝刊で掲載している連載企画をまとめた。

設問では、本県からの海外ボランティアの地域別人数と国数をまとめた図の資料として使われた。例えばアジアは131人で19カ国、欧州は6人3カ国など。県教育委員会は出題の狙いを「海外ボランティアに目を向けてグローバルな視点を養うほか、新聞を通して社会的な視野を広げてもらいたかった」と説明した。

平成31年3月11日【山形新聞】掲載

JICA 中小企業海外展開支援事業 説明会

2018 年 11 月 15 日、天童温泉・ほほえみの宿 滝の湯にて JICA 中小企業海外展開支援事業説明会を開催しました。

近年、日本の中小企業の開発途上国進出の機運が高まり、海外に於いても日本の民間企業の技術やアイデアによる貢献が期待されています。JICA では企業の海外展開支援を行っており、全国で 700 件を越えています。支援事業は JICA が窓口となって（1）途上国での需要を把握する「基礎調査」（2）製品や技術の活用を探る「案件化調査」（3）現地での製品普及に向けた「普及・実証事業」があり、それぞれ 850 万円から 1 億 5 千万円までの限度内で、旅費や現地活動費などの経費を支給するというもの。県内からは、これまで 3 社がこれらの支援制度を活用して、海外展開への調査活動を実施。当会でも JICA と連携して、毎年県内での説明会を開催してきました。

今回は、ワーコム農業研究所、エスキー工機、テクノ・モリオカ、工藤コンクリート、まるつね果樹園、ソーラーワールド、大江車体特装、山形県酒造組合、Ni クリエイト、アグリーエナジーインターナショナル、RT アシスト、福山コンサルタント、山形県工業技術センター、山形県企業振興公社、荘内銀行、きらやか銀行、高畠町商工観光課の事業体の皆様がご参加でした。

JICA による中小企業海外展開支援事業、JICA 中小企業・SDGs ビジネス支援事業とコンサルタントの活用、人材の確保・育成について説明の後、ワーコム農業研究所の栗田代表取締役から情報提供頂きました。

意見交換では、JICA と国際開発ジャーナル社・高井氏から有益な助言がありました。

《平成３０年度　協力隊を支援するやまがた地球家族の会 事業報告》

期　日	事　　業	会場／参加者
平成 30 年 5 月 26 日	定例総会／事業報告、決算報告、事業計画、予算の承認、役員改選 マラウイ、ニカラグアの協力隊員帰国報告	出羽庄内国際村 ／２１名
6 月 18 日	３０年度１次隊壮行会 パプアニューギニア、キルギスの隊員の表敬並びに壮行／マラウイ、ニカラグア、バヌアツ、フィリピン、ネパールの隊員の帰国表敬	県庁 ／１１名
9 月 25 日	３０年度２次隊壮行会 パラオ、コロンビア、ケニア、スリランカ、ガーナ、スリランカ、アルゼンチンの隊員の表敬並びに壮行／ウズベキスタン隊員の帰国表敬	県庁 ／１１名
11 月 15 日	ＪＩＣＡ中小企業海外展開支援事業説明会 ＪＩＣＡ、育てる会の報告、企業等１５団体との意見交換	天童温泉 滝の湯 ／３０名
12 月 20 日	３０年度３次隊壮行会 ラオス、東ティモール、ザンビア、ケニアの隊員の表敬並びに壮行 ニカラグア、ボリビアの隊員の帰国表敬	県庁 ／9 名
平成 31 年 3 月 10 日	ボランティア家族連絡会及び帰国報告会 国際協力エッセイコンテスト受賞者表彰式及び朗読発表 ニカラグア、マラウイの隊員による帰国パネルトーク	国際交流センター ／５１名
3 月 28 日	３０年度４次隊壮行会 ペルー、ケニアの隊員の表敬並びに壮行	県庁 ／5 名

※ 5月２６日 ― 機関紙発行　※ 育てる会のカレンダー作成並びに会員への送付

JICA ボランティア家族連絡会

2019 年 3 月 10 日、エッセイコンテスト表彰式および帰国隊員 2 名による報告会が行われた後、JICA ボランティア家族連絡会（旧・留守家族懇談会）が開催されました。山形県から派遣中のボランティア 6 名と 2019 年度派遣予定 1 名、合計 7 名のご家族がご参加。この会は、JICA からの説明やボランティア OB との懇談を通して、隊員家族に JICA ボランティア事業への理解を深めていただく場となっています。

現地での支援内容、事故や病気になった時の対応、帰国後の進路など、留守家族の不安を軽減できるよう情報提供がありました。キルギス、ザンビア、ホンジュラス等、どちらかと言えば馴染みの薄い国々で活動している JICA ボランティアの留守家族にとって、忌憚なく悩みや不安を話し合える貴重な機会になっています。

◆山形県からの JICA ボランティア派遣状況

54 年の歴史を持つ青年海外協力隊をはじめ、延べ 5 万人以上の JICA ボランティアが日本から世界へ飛び出してきました。

現在は、JICA ボランティア全体で 2041 名が派遣中。アフリカ地域の 705 名を筆頭に、北米中南米 561 名、アジア 505 名、オセアニア 195 名、中東 72 名、ヨーロッパ 3 名とまさに世界中で活躍しています。

#青年海外協力隊 73 カ国に 1666 名が派遣中。そのうち、女性が 946 名と約 57% を占める。山形県からは 13 カ国に 15 名が派遣中。そのうち 12 名が女性で、8 割を占める。

#シニアボランティア 52 カ国に 252 名 (75 名)。県内からは男女 1 名ずつが派遣中。

#日系社会青年ボランティア ブラジル、パラグアイ、アルゼンチンなど北米中南米地域の 5 カ国に 90 名 (61 名)。県内からは女性 2 名が派遣中。

#日系社会シニアボランティア 現在派遣なし。

(平成 31 年 3 月 31 日現在)

◆山形新聞掲載『世界が舞台～活躍する県人』より

No.461　佐藤麻衣さん　　(2019 年 4 月 6 日)

山形市出身・山形大学農学研究科卒・セネガル・野菜栽培

山形市出身の佐藤麻衣さん (26) は、山形西高校から山形大学農学部に進み、山形大学大学院農学研究科を卒業。2017 年 7 月から青年海外協力隊として、野菜栽培の職種でセネガルに派遣されています。今回は現地の食生活について寄稿してくれました。

「セネガルは米が主食で、川沿いでの米の生産が盛んです。しかし、国内生産は追いつかず、アジアから輸入した砕米を食べています。私は国産米のほうが美味しいと思って買うのですが、残念ながら輸入米のほうが安く、かつセネガル料理にあうのです。」

「セネガルの一般的な家庭ではみんなで一つの大皿を囲んで食べます。代表的な『チェブジェン』と言われる料理は、味付けしたご飯の上に煮込んだ魚や野菜が乗っています。」

「私がよくお世話になっている家庭では、お母さんと子供たちで食べることが多いです。みんなで一つの皿を囲むことで私も家族の一員になっている感じがしてうれしいです。」

※『世界が舞台』は毎週土曜、山形新聞に連載中。やまがた地球家族ブログでも紹介しています。

(5)　2019年（平成31年）4月6日（土曜日）　国際

世界が舞台

活躍する県人 461回

セネガルは米が主食で、川沿いでの米の生産が盛んです。しかし国内生産は追い付かず、アジアから輸入した砕米を食べています。私は国産米のほうがおいしいと思って買うのですが、残念ながら輸入米のほうが安く、かつセネガル料理にあうのです。今回はセネガルの食事についてご紹介します。

セネガルでは朝はフランスパン、昼は粥、夜は雑穀のトウジンビエを食べることが一般的です。他にもスパゲティやフライドポテトを食べることもあります。調味料も意外とそろっていて、塩、砂糖の他に酢、マヨネーズ、マスタード、唐辛子、こしょう、固形の合わせ調味料などさまざまなもので味付けします。こう書き出すと食材がそろっていて近代的な感じもします。

セネガルの一般的な家庭ではみんなで一つの大皿を囲んで食べます。代表的な『チェブジェン』と言われる料理は、味付けしたご飯の上に煮込んだ魚や野菜が乗っています。上に乗っている大きな具は お母さんが取りわけます。一皿を囲んで座り、目の前にある部分を食べます。カレーライスを皿から食べるようなもの。もちろん座席や自配の人の皿に具がたくさん入っています。

料理を囲みだんらん

佐藤 麻衣さん（26）　山形市出身　セネガル、野菜栽培

感覚で、自分の陣地をはみだしたりすると不快に思われるのがち食べ進めていきます。余ったらざまなもので味付けします。決して陣地に入ってはいけません。表面だけ食べて、皿に分けて食べ、年配の人や客のために小皿に分けます。

上に煮込んだ魚や野菜が乗っています。食事にはルールがあります。女性と男性は違うトウジンビエを食べます。夜に食べるために手にきれいにして、板を敷き、具を敷き詰めたり、ぐちゃぐちゃ食べ進めたり。食事の際に見た目を気にすることは、なんとなく日本と似ていると思います。

私がよくお世話になっている家庭では、お母さんと子供たちで食べることが多いです。みんなで一つの皿を囲むことで私も家族の一員になっている感じがしてうれしいです。

昼ごはんのチェブジェンを囲む佐藤麻衣さん（右奥）

横顔　さとう・まい　山形西高から山形大農学部に進み、同大学院農学研究科卒。2017年7月から国際協力機構（JICA）青年海外協力隊としてセネガルに派遣された。職種は野菜栽培。26歳、山形市出身。3回目の寄稿。

■JICA 国際協力中高生エッセイコンテスト 2018 入賞おめでとう！

山形県では３名が個人賞に、４校が学校賞に入賞。

2019 年 3 月 10 日、山形県国際交流センターにて、JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストの山形県表彰式が開催されました。

本コンテストは、次の世代を担う中学生・高校生を対象に、開発途上国の現状や開発途上国と日本との関係について理解を深め、国際社会の中で日本、そして自分たち一人ひとりがどのように行動すべきか考えることを目的として実施しています。2018 年度のテーマは「世界の幸せのために私たちができること」。全国で中学生の部 37,748 点、高校生の部 34,738 点、県内からは中学生の部 228 作品、高校生の部 422 作品の作品が集まった中で、個人賞 3 名、学校賞 4 校が受賞。2 名から朗読発表して頂きました。

◆独立行政法人国際協力機構東北センター所長賞
【異国の風に吹かれて】（中学生の部）
太田珠伽さん／南陽市立宮内中学校 3 年

◆独立行政法人国際協力機構東北センター所長賞
【輪が作る世界の幸せ】（高校生の部）
庄司百伽さん／県立山形東高校 2 年

◆ NPO 法人山形県青年海外協力協会会長賞
【私の故郷を世界へ】
伊藤北斗さん／県立鶴岡中央高校 2 年

◆学校賞
・飯豊町立飯豊中学校
・山形市立山寺中学校
・山形県立谷地高等学校
・山形県鶴岡中央高等学校

エッセイコンテスト表彰

▼外国に住んだ経験がある叔父さんから、異国で“桜”を通じて人と人とがつながった体験を聞いた太田さん。世界の平和について、「武器ではなく花を植えよう、手を取り合い笑顔でいよう」と願う気持ちをエッセイに込めました。

▼教科書で知った、パラグアイ最大のごみ集積地域「カテウラ」。庄司さんは、廃棄物から作られた楽器を作って演奏する子どもたちの存在から、自らが問題を知り、発信すること、熱中できることを探すことの大切さを、エッセイを通して伝えています。

▼伊藤さんの故郷・鶴岡市は、2020 年東京オリンピック・パラリンピックでモルドバ共和国のホストタウンになっています。モルドバの方との交流や対話を通して、遠い存在であった「外国人」が、話すことや伝えることを通して身近な存在となることを知った伊藤さん。そして、国を超えてひとりひとり個人の対話から理解しあうことの大切さを書いてくださいました。

『協力隊を支援する やまがた地球家族の会』入会のご案内

【会費】 ●個人会員＝3000 円　●家族会員＝1000 円（個人会員の家族）
●学生会員＝1000 円　●団体会員＝10000 円（企業及び団体）

【会員特典】 JICA ボランティアの姿を通して、世界が見える！「国際ボランティアマガジン 月刊《クロスロード》」を、年間購読料 5000 円のところ、希望する会員には 2000 円の送付手数料のみで 1 年間 12 冊ご提供いたします。

☆お問い合わせ／ご入会のお申し込みは、当会事務局まで。

やまがた地球家族 Vol.17　令和元年 6 月 1 日発行（第 1 7 号）　発行人／酒井忠久

発行／〒 999-7725 山形県庄内町沢新田 151 富樫方　『協力隊を支援する やまがた地球家族の会』事務局
TEL&FAX) 0234-42-1458（富樫）　E-mail) info@chikyukazoku.net　Website) http://www.chikyukazoku.net/